

「中国への戦争態勢」は誰のための何のためのものか

—東アジアでの戦争を止めるために—

上記タイトルの新たなブックレットを今年2月20日前後に発行予定です。目次を裏面に記載していますのでご覧ください。購入していただける方は、下記までご連絡ください。よろしくお願ひします。（著者：高井弘之／価格1300円 A5判 172頁）

◆メールアドレス：takaihiroyuki123@gmail.com / 携帯：090-2783-4568 （送料は実費分お願ひします）

※ 10冊以上ご注文いただける場合は、1冊分1100円とさせていただきます。（送付時に振込用紙を同封します）

戦後日本国家は、自らの侵略・植民地支配を深く反省することも、その侵略責任・支配責任を果たすこともないまま、いま、新たな戦争体制を構築し始めている。中国への攻撃態勢であるそれは、いまや、臨戦態勢の域にまで達している。

近代日本国家は、150年ほど前に東アジアに登場して以来、周辺諸国への軍事侵略一占領を次々と展開し、膨大な数の人びとを殺戮一支配し、アジアの大国となっていった。

この長い期間、日本は、アジアの人々・国々に対する支配者・加害者として、独自に、あるいは欧米列強と共に、東アジアを軍事的・経済的に侵略し、人びとの命と平和を奪って来た。現在、進行している「中国への戦争態勢構築」は、この近代日本国家・大日本帝国の軌道の延長上にあるものだ。

昨年秋の「高市発言」は、米国と共にではなく、単独でも、中国との戦争を始めるという宣言の意味を持つ。各世論調査では、その「高市発言」を撤回する必要がないという意見が7割近くに達している。かつて、日本が中国への侵略・支配を拡大していったとき（1937年）、日本の政府・メディアは、「暴支膺懲」（暴虐な中国を懲らしめる）のスローガンを発し続けた。中国側の当然の抵抗行為を「暴虐・横暴」とし、だから、「膺懲」するのだとして、自らの行為を正当化し、国民の戦意を煽った。

そして、多くの国民が、このスローガンとそれに基づく軍事行動を支持し、侵略への挙国一致体制がつくられていった。この「日本政府と日本国民」だけの閉じられた空間には、問題の——現実の根本にある自らの侵略行為への視線は、存在していなかった。

いま日本では、中国への敵対意識を煽る発言ばかりが溢れ、なぜ中国が「高市発言」に強く抗議しているのかを、中国の立場に立って知ろうとする姿勢は、ほぼ、存在していない。問題の発端一起点がこの「発言」にあることさえ忘れられ、対中「挙国一致体制」の完成へと走っているようだ。

世界への窓を閉じた偏狭な「日本空間」の中で、独りよがりの「自己正当化」の主張だけが声高に発せられている状況に、いま、日本社会はここまで来ているのかと暗澹とし、恐怖さえ覚える。

しかし、手をこまねいているわけにはいかない。この状況とそのさらなる進展を私たちは止めなければならない。そうしなければ、私たちは再び、中国—アジアの人びとに対する加害者となり、ここ東アジアに住む私たちの暮らしも命も失われる。

私たちは、近代日本150年の歴史を内省的に総括し、「対中戦争準備」を阻止し、今度こそ、日本を、東アジアの平和を実現する側の国へと変えなければならない。

いまのこの状況に抗い、戦争を止めたいと願っている方に、そして、そのための活動をしている方がたに、この小著が少しでも役立つことを願う。

【目次】

第一章 日米による「中国への戦争態勢」

—敷設される「戦争への導火線」—

- (1) 沖縄から西日本・全国へと拡大する「軍事態勢—軍事拠点化」
- (2) 対中国「日米共同戦争計画」
- (3) 日米 NATO による「対中国軍事包囲網」の構築
- (4) 「台湾有事」とは何か

第二章 「戦争態勢構築」は、誰のための何のためのものか

- (1) アメリカの対中姿勢の転換
- (2) 「戦後の国際秩序」とは何か
- (3) グローバルサウスの台頭と「欧米日」の後退
- (4) 「欧米の世界支配 500 年／日米欧の東アジア支配 150 年」の歴史的転換期
- (5) 誰のための何のための戦争か
—西側・帝国主義国の「世界支配維持」への欲望—

第三章 「中国脅威論」とは何か—その克服・解体への視座—

- (1) 「中国脅威論」によって推進される大軍拡
- (2) 「専制 対 民主主義」の偽装で行なわれる「中国包囲網」
- (3) 「人権・人道」の名で行なわれる侵略戦争
—「東西対立」終焉後の米・NATO の軍事侵略—

- (4) 「反中国」構築手段としての「人権・人道・民主主義」
- (5) 中国を「無法者」に仕立て上げる日米欧
—南沙諸島問題から見えて来るその「からくり」—
- (6) 「米国の対中姿勢」と「中国の対米姿勢」—その顕著な違い—
- (7) 中国の「国際秩序—世界」への姿勢
- (8) 主観的「中国脅威論」を解体し〈平和と共生の東アジア〉を！

第四章 東アジアでの戦争を止めるために

—〈平和と共生の東アジア〉に向けて—

- (1) 「植民地主義の克服・解体の道程」としての歴史的現在
—バンドン会議・非同盟運動・ブリックス— その共通する視座—
- (2) 「大日本帝国 150 年」からの歴史的転換を！
- (3) 「中国包囲網」から脱してアジアの平和の実現を！